

文芸研ニュース

2022年7月29日
—NO. 161—
発行 文芸教育研究協議会
編集 文芸研事務局



今年は記念講演も楽しみ！

卷頭	辻委員長より	・	・	・	・	・	・
全国大会初の特別支援分科会	・	・	・	・	・	・	・
初レポートより	・	・	・	・	・	・	・
事務局通信	・	・	・	・	・	・	・
事務局員の妄想日記	・	・	・	・	・	・	・
	10	9	7	5	4	1	

第56回オンライン全国大会に向けて

委員長 辻恵子

教育DXが変える学びと学校

◆「文芸教育124号」に児美川孝一郎氏（法政大学）の特別寄稿「Society5.0は子どもたちの学びをどう変えるか」が載つたのは昨年の夏でした。「GIGAスクール構想」に振り回され、ICT活用先にありきの混乱した学校現場で、わたしはなるほどそういうことかと目から鱗の思いで読みました。皆さんの記憶にも新しいのではないでしようか。

その児美川氏の論考「教育DXは学びと学校をどう変えるか」がこの6月、「クレスコ255号」に掲載されました。そこで氏は、「GIGAスクール構想は「前座」でしかなかった。その先には、GIGAスクール構想を踏み台とした大がかりな教育改変が構想され、画策されていたのである」とその教育改変＝「教育DX（デジタル・トランスフォーメーション）」について、学びと学校をどう変えるかという視点から鋭い切り口で書いています。

教育DXとは、教育のデジタル化のみを指すので

はない。教育のデジタル化を進めるることは、教育そのもののあり方を質的に変容させる。その質的変容（構造転換）こそが、教育DXである。」という説明は、何となく感じていた現場の実感に言葉を与えられた気がしました。

そう、こんな現場の実感——デジタル教科書の流れに沿つて授業を進めるのは、多様であるべき授業をパターン化してしまい、誰がやつても同じ指導になつているみたい。A I ドリルは自分の興味関心に従つて自由に進められるというけれど、結局子ども任せで、できるもできないも子どものせいというのはおかしいんじやないの。教師がすべき教材研究が、授業動画作り（既成の動画探し？）にとつてかわっているなんてもう世も末だ。——などなど「皆さんも感じておられることでしょう。デジタル化がもたらした教育の質的転換がすでに目の前にあることに改めて愕然とさせられます。

◆いや、愕然とするのは、その先に垣間見える公教育の破壊です。論考では教育DXが既存の公教育の枠そのものを突き破り、次の3つの転換をもたらすことを考えておく必要があると述べています。「第一は公教育の『個人化』『自己責任化』である。教育DXは学びの内容と方法を徹底して個人向け（個別最適化）にカスタマイズする。結果として共同・協働

による豊かな学びの実現可能性は収縮し、学びの目的そのものも個人主義化されてしまう。」わたしたちがめざしてきた主権者を育てるという教育の目的はすっぽりと抜け落ちてしまいそうです。「第2は、公教育の『市場化』である。法的規制の緩和がなされれば、公教育の民営化にも突き進むことになろう。市場ベースで提供されれば教育サービスの質の保証が難しくなるのは火を見るより明らかでしょう。「第3は公教育の『統治システム化』である。学習面のみならず生活面を含めて集積されるビッグデータを活用しつつ、子どもたちを監視し、動員し、統制していく。公教育はその装置としての役割を担うのである。」どれもこれも、ずつしりと重くのしかかるようなことばかりです。

教師の創造性が失われ、多様で豊かな、本当の意味で「おもしろい授業」がなくなつてしまつては、教師にも子どもにも学校はもはや楽しい場はないでしょう。

◆それなのに、というかそれによつて教師の分断が引き起こされるとも氏は述べています。たしかに、職員室で子どものことを語り合つたり、教材分析をいつしょに考えたり、そんな当たり前のことができなくなつてきています。また、I C Tに強い（主に若い）教員はやたらと仕事が増え、その一方でベテ

ラン教師の長年培ってきた指導力が顧みられなくなったり、本人も自信を失っている、そんな話をよく聞きます。

まだ間に合う今だからこそ

共に学び、共に語ろう

◆ でも、まだ今ならできることがあります。例えば

国語で、物語教材をしつかり学ぶことはだれにも止めることはできません。あなたの周りに、指導書通りの進め方に違和感を抱きながらも同調圧力から

「ちょっと隣の組と違うのは不安」「他はワーケシートを使ってるけど」と足踏みしている若手がいませんか。もしいれば、「もっと子どもが目を輝かせるやり方があるよ」と文芸研の教材分析を語り、授業の方法を勧めるチャンスです。もしかしたらちょっと勇気がいるかもしれませんのが、よいと思うことをでかけるうちにやることです。あなたが自己規制しているうちに、そのうち本当にやりたいことができなくなる時がきます。

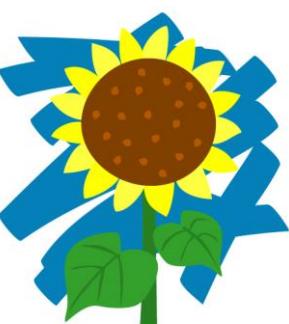
◆ 第56回オンライン全国大会は、今できることをやる、本物を求める、そんな良心の闘いであるとわたしは思います。急激に変わることの時代の流れに抗して、人間とは何かを見つめ、ものごとの本質や価

値、意味を問う授業をめざして語り合いましょう。はじめて参加してくださった方に、「ああ教材をこんなふうに読むなんて深い！」と教材分析のおもしろさ、豊かさを伝えましょう。そして、授業の実際では、子どもたちの生き生きと語り合う姿を見せましよう。たとえ失敗した部分があつても、共に学ぶことのよさは確実に伝わります。自信を持つて臨んでください。

◆ 大会事務局の皆さん、これまでにも増して、さらに忙しくなることと思いますが、大会までどうかよろしくお願いいいたします。

◆ 時間もお金もそれほどかからないオンライン大会だからこそ、参加できるという人がたくさんいるはずです。これから、周りの仲間に「ちょっとのぞいてみて」とどんどん声をかけてください。

この大会に力を結集することは、来年度リアル開催を予定している山口大会に続くより大きな力になる、その意気込みをもって大会の参加を呼びかけていきましょう。



大会成功をめざして、
がんばりましょう！

全国大会初の特別支援分科会

初の特別支援分科会の成功に向けて

「おれはこのひまわり学級に人生救われた」

私は文芸研に人生救われた

広島サークル 向井美穂

委員長の辻先生からお電話をいただいたのが、昨年9月のことです。何度も自宅にかけて下さったのに、毎晩帰宅が遅く、連絡が取れたのは数日後でした。そのお電話は、文芸研に特別支援分科会を立ち上げ、1回目を担当して欲しいという依頼でした。初めての分科会で前例もなく、1から作つていく不安もありましたが、なにより心の余裕がなく、今の自分にそのような責任ある仕事を引き受けるだけの自信がなかつたのです。広島サークルの先生にも相談して、お返事をすると約束をし、電話を切らせていただきました。

サークルでは、これまでの特別支援学級での実践を評価していただき、「きっと参加した人もたくさん学んで帰れるはずだから、やってみてはどうか。」

と背中を押してくださいました。

悩みに悩みましたが、特別支援学級での大変さを救つてくれたのが、文芸研の理論です。楽しくないこと、面白くないことには一切興味を示さない子どもたちが、本や詩、新聞などの記事を読み、そのことと毎日の生活を結び付けながら仲間とのつながりを深める中で、自分に自信をもつて成長していく姿に感動しました。そしてその温かなつながりの中で、不適切な行動をくり返し、心がボロボロになつて入級してきたG君は、「おれはこのひまわり学級に人生救われた。先生ありがとうございます。」と言つて卒業していきます。G君の成長が私自身の成功体験となり、今も苦しい時の心の拠り所になつています。また、子どもたちの苦しさに寄り添い、一人一人のよさが集団の中で生かされる学級をつくつていかなければならぬという責任と使命を感じる原点にもなつています。

冬の実践研では、過去の実践からどの年度の実践を提案したらよいか、『文芸教育』の実践を読んで下さった先生方からの発言に背中を押していただき、初任の時から一緒に学んでいる青年学校の同期から応援をしてもらつたりと、いつも全国の文芸研の先生方とのつながりを感じています。その中で私のよさをたくさん認めてもらつてている気がしま

す。

数年前の実践ですが、パワー・ポイント用の写真を整理しながら、新しい発見がたくさんありました。苦しかったと思つていた日々の中にたくさんの楽しい思い出があつたのです。子どもたちの笑顔を見ていると、その時の楽しかった記憶がよみがえつてきました。また、たくさんの活動を子どもたちが考え、どうしたら成功できるかと必死に考へる真剣なまなざしにも再会できました。何より、その作業を通して、「私がんばつていたんだな。これだけのことをよくやつたな。」と自分で自分をほめることができました。G君がクラスの仲間によきを認められて自信を取り戻し、自分らしさを發揮できるようになつた姿と、私自身が文芸研の仲間に支えられ1日1日を積み重ねていることが重なつて見えました。

分科会では特別支援学級の子どもたちはもちろん、通常級のこどもたちを含め、一人一人のよさが生かされる実践につながるよう、文芸の授業を中心とした1年間の取り組みについて焦点を縛つて話したいと思います。そして、私自身も参加者の皆さんと一緒に学び多い1日になるよう、がんばりたいと思ひます。

初レポーターより

今大会で、1年生の「ずうつと、ずつと、大すきだよ」で初レポーターをできることになり、挑戦できることへの嬉しさと自分にできるのかという不安がありました。しかし、文芸研に出会い、学ぶことはすごく楽しいことだと知りました。挑戦できたことで、自分自身が成長できたと感じています。

「ずうつと、ずつと、大すきだよ」は、私がすごく大好きなお話です。〈ぼく〉は、〈エルフ〉と毎日を共に過ごし、〈エルフ〉がかけがえのない存在にな



つてきます。そして、『エルフ』の一生を通じて、
『ぼく』は愛することを学びました。そのことは、

『ぼく』のこれから先の人生を豊かにしてくれるものだと私は意味づけました。そんなお話を、元気い

っぱいのこの子どもたちと一緒に授業できただことが嬉しく思います。授業記録からも子どもたちが、一生懸命に考えていることが伝わるかと思います。

授業のレポートをするにあたり、同じ唐津のサーカルの先生方や福岡の先生方をはじめ、たくさんの方々にご指導いただきながら、実践をすることができました。一人ではできませんでした。そして、この学級の子どもたちと共に学んだ授業を、さらに良いものにするために、多方面よりたくさんのご意見をいただけると嬉しいです。どうぞ、よろしくお願ひいたします。

唐津文芸研 川口芹奈



大会に向けた意気込み

広島文芸研 三浦兼春

これまで、たくさんの同僚や先生方から、たくさんのお話をもらいました。

その中に、私の師匠と思う。そんな先生が関西にいます。大学院に「内地留学」していたその先生からは教師として必要なことをたくさん教えてもらいました。その中には、「事務の先生には、旅行のお土産を必ず買え。優遇してもらえる。」など、実践的な(?)教えもありましたが、「所属する自治体ではないところの先生とも積極的に実践を交流し合える教師になれ」というものがありました。この教えが、文芸研に入り、今回の大会で発表することになった原動力になっています。

大会に向けた教材研究や、レポートの作成、授業、授業記録は、かなりの体力を使いました。出来上がった授業記録を読んでも、(うーん、ここは微妙だつたな)と思うところが多々あります。授業はやはり難しいと、思い知らされました。発問や切り返しといつた授業展開力や、子どもの発言を予測する子ども理解の弱さを感じました。

ひと昔前、ある実践家が「もとより、『完成された

仕事』などあるはずはない。『完成された仕事』を目指す絶え間ない追跡の連続があるにすぎない」と書いています。

この大会での発表が、今より少しでも、理想に近づくための追跡の一歩になればと思っています。

サークル便り

豊かな時間

津軽サークル 野宮直美

私と文芸研との出会いは、二人の尊敬する先生方との出会いでした。

■ 成田徹夫校長先生との出会い・・・子どもたちの目の輝き

成田校長先生は、授業時間、よく学校の中を散歩しているかのようにてくてくと歩いている校長先生でした。当時、私は一年生の担任で国語の授業が終わり、職員室に戻り、子ども達が授業に集中してくれないと愚痴をもらしました。すると、校長先生が、すーっと来て、

校長先生 「次の時間、国語の授業をさせてくれな

いか。」

「助かります。次のところは・・・。」

校長先生 「いいえ。さつき授業してた所をもう一度。そして、あなたは、後ろで参観してください。」

（えつ、同じ所をもう一度）と複雑な気持ちになりました。授業開始五分、子ども達の目が輝き出しました。『原因は、子ども達ではない。自分だ』とうことに気付かされた瞬間でした。

（あの子ども達の目の輝きをもう一度見たい。そのためには、学ばなければ。）

と強い思いをもつた瞬間でもありました。

当時の私は、育休明けで二人の子育て奮闘中。睡眠時間四時間の毎日でした。国語の教科書をにぎりしめ、校長室の扉をノックし、何度か教材の見方について教えてもらうことができました。西郷先生の本も何冊かいただきました。そんな恵まれた環境にありながら、時間に追われ、校長室の扉をノックできない日々が続きました。しかし、心の中にはいつも「授業で子ども達は変わる」という言葉がありました。

■ 高橋睦子先生との出会い・・・子どもたちを包み込む温かさ 安らぎ

幸運にも睦子先生と学年を組ませてもらうことが

できました。睦子先生の学級通信に載せられている作文、それに対する子ども達へのコメント、まさに子供へのラブレターでした。

睦子先生の授業では、いつも子ども達が、楽しそうに話しています。話すというより、語っています。

（睦子先生みたいな授業をしてみたい、子どもたちに温かい言葉を贈れるようになりたい）と憧れました。そこで、睦子先生の秘密を探るべく、一ミリでも近づきたいと夏の集会や秋の集会、青森で行われた全国大会に参加するようになりました。

二人との出会いから十年。下の子が高学年となり、やっとサークル員の一員となることができました。サークルの学習会は、豊かになれる時間でした。

「なるほど。」「そつかー。」「これは、どう解釈すれば・・・。」「全集の〇ページに書いてあつたよ。」「読み返してみると・・・。」「この子のとらえ方、すてき。」

学習会で飛び交う言葉です。サークル員ではない人も学習会で一緒に学習していることもあります。サークル員か否か、年齢や教師経験など関係なく、一つの教材について考え、意見を交わしていきます。その時間が楽しく、豊かな時が流れています。知

る楽しさ、学ぶ楽しさ、教材に向き合っている新しい視点を知ることができ、いつも自分という人間も豊かになった、そんな気分で学習の後はいつも心地よい気分で帰途についています。

今年の二月の学習会・・・の終わり・・・全国大会の詩入門の提案のために一人一つ教科書教材の解釈に挑戦することが決まりました。しかし、コロナと連日戦することが決まりました。この大雪。急遽、LINEに『詩入門』のグループができました。このLINEグループには、サークル員でない方が二人も友達登録してくれました。この二人、いつも核心をついてくれます。そして、一人の方は、詩を一つ選び教材解釈してレポートにしあげ、提案までしてくれました。最新のICT機器に翻弄されながらも、オンラインで毎週のように教材についての話し合いは続きました。時間は、いつの間にかあつという間にすぎ、気が付くと3時間という日も。二月、三月の二ヶ月間は、文芸教育全集を開いては、悩み。悩んでは、開きの日々が続きました。

私は、『紙風船』を選び解釈に挑戦しました。難しい言葉もなくすと読め、美しい素敵な詩です。しかし、私にとつては、授業で子どもたちの目を輝かせることができなかつた、語り合うことができな

かつた詩です。全集を読んでもなんとなくしかつかめず、教材解釈の甘さと読み取れない自分の力のな

さに、授業の後もやもやしたものが残ってしまう詩でした。そこで、この機会に多くの方々の力をかり、この詩のおもしろさを知り、この詩の味わいや美しさを子どもたちと感じたいという思いでレポートに望みました。今は、早く高学年をもつて、この詩の美しさを子どもたちと味わいたいとわくわくしています。（現在は、四年生担当）

今年、全国大会の詩入門講座で、代打で「ゆき」の詩のレポーターをすることになりました。代打ではあります初レポーターで今から緊張しています。学習会でいつも私が感じている「新しい視点を得る時のわくわく感」が伝えられたらと思っていました。そして、「豊かな時間」だつたと講座終了後に感じでもらえるよう頑張りたいと考えています

西郷会長の言葉が聞こえきました。

さて、この間、酒井大会実行委員長を始め、大会事務局の皆様のご尽力で、第56回文芸研文芸教育全国研究大会（オンライン開催）を開催することができます。皆様の活動に感謝しています。また、1人でも多くの方に参加して頂こうと、全国のサークル員の皆さん呼びかけ行動により、参加の輪が広がりました。皆さんの1回の呼びかけ、1枚のチラシ、1つの行動がたくさんの人的心を動かす事が出来ました。

参加して下さった皆さんが、笑顔で帰れるように皆様と力を合わせて、大会を成功に導いていきましょう。

★「代表者会議でも話になりましたが、今後のサークル活動が大切になってしまいます。オンラインでの大会を活かし、各地での国語の教室の開催にむけて、文芸研の輪を広げる運動をしていきましょう。

事務局通信

今年度は、6月から真夏を思わせる暑さが続き、蝉が鳴かないことから静寂の夏かと違和感を感じました。しかし、7月になれば、いつものように蝉の鳴き声がして、夏を感じています。「諸法実相、全てはありのままの姿をあらわしているんだよ。」という。

★「サークルのライオン」が新刊として発刊されました。これを機会に、文芸教育、授業シリーズについての呼びかけ・販売をお願いします。学習会が組織しにくい中ですが、サークルでの学習や学校の同僚への紹介など、工夫して広げていきましょう。

現地での全国大会がない中では、書籍、学習会が運動の柱になります。ぜひ、サークルでのご検討をお願いします。

今後の予定

★サークル会費納入お願い。まだお済みでないサークルは振り込みでの納入をお願いします。ご協力よろしくお願いします。

- （予定がくわしく決まりましたら随時連絡します。）
- ・8月27日（日）20時（サークル代表者会議）
- ・12月26日（月）27日（火）（冬の実践研（神戸））
- 状況によって変更もあります。



【事務局員の妄想日記】ある日の学級通信より『ドリアにかんぱい』

色々な料理を作れるようになると、しばりく作らなくなる料理がありませんか。作らないと、作り方やコツを忘れそうになります。だから、食べるためを作るというより、忘れないために作る時があります。「それとも、あれを作らないと。」と、日曜日の晩はドリア。その名も、「ミラノ風ドリア風ドリア」です。

ん? どこかで聞いたような…。そう。サイゼリアのミラノ風ドリアです。でも、私はあのミラノ風ドリアを自宅でも再現しようと自分で考えたので、「ミラノ風ドリア」風のドリアという意味で、こう名付けています(笑)。勝手にミラノ風ドリアと名乗るのは、サイゼリアに悪いので。

牛乳に小麦粉を加え、とろとろになるまでフライパンでホワイトソースを煮詰めながら、あることを思い出していました。数ヶ月前に、図書館で借りた料理本で衝撃的な事実を知ったことです。色々な料理が写真付きでのついている中、そこにドリア。その名も、「ミラノ風ドリア…風ドリア! なんだとお! 自分のものだと思っていたミラノ風ドリア風ドリア。家族にも何度も何度もふるまつてきたミラノ風ドリア風ドリア。まさか、実在していたとは! ネーミングが完全

にからつてこれー。

問題は、じからが先に「//リノ風ドロア 風ドロア」を生み出したのか。その本の写真を見ても分かりませんでした。じからは、おそらく長くて十二年前ぐらい。短くて十年ほど。歴史は浅くはない。ただ、それだけでは比べようもありません。

ここで、さらに重大な事実に気づきました。仮にこちらの「ミラノ風ドリア風ドリア」歴が長かったとしても、とてもなく不利な状況にあるということです。相手がまだ一年ぐらいの後輩だとしても、ここにじつやつてレシピ本を出版しているのです。一方にからねじりですか。学級通信に書いているだけです。

むづこれば、完敗。そんなことを思いながら、「いたきまーす。」家族で乾杯。「//リノ風ドロア 風ドリア」をいたしました。完全に、ドロアにかんぱいです。

(完)